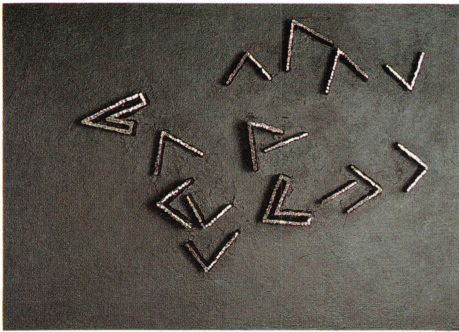


円弧形態による構成、および、それに  
いたるプロセス 1987年～1991年

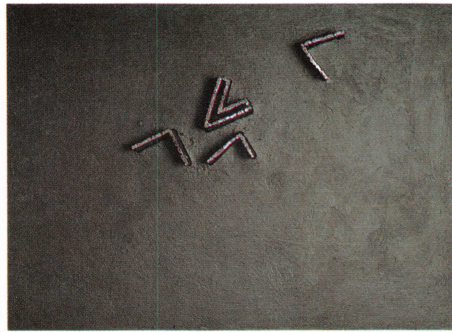
Composition with Circle;  
and the Process to Discover it '87～'91

加藤松雄



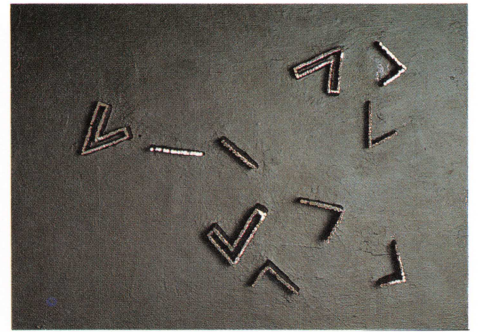
1-A L字方式80-5

39.5×54.0×6.0cm  
レリーフ 1979年



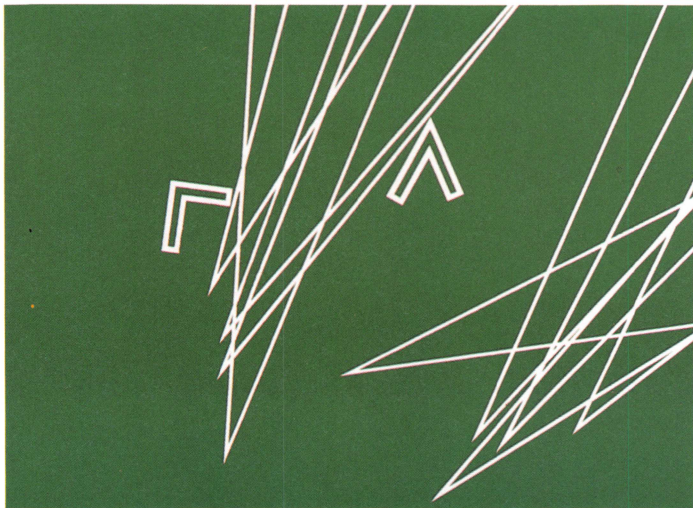
1-B L字方式80-34

39.2×54.4×6.5cm  
レリーフ 1979年



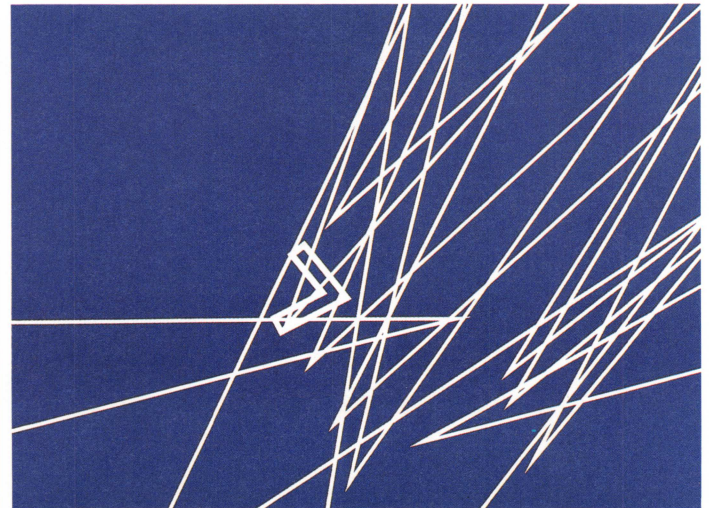
1-C L字方式80-35

39.5×54.0×6.0cm  
レリーフ 1979年



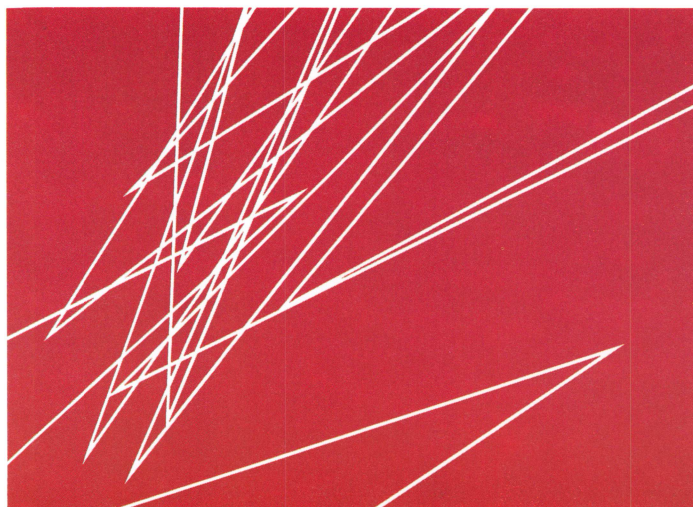
1-D L字方式81-41

39.0×54.5cm シルクスクリーン 1981年



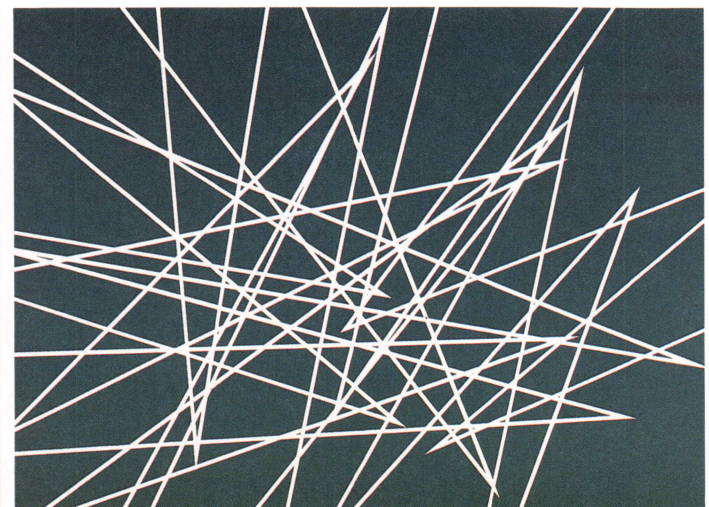
1-E L字方式81-58

39.3×54.6cm シルクスクリーン 1981年



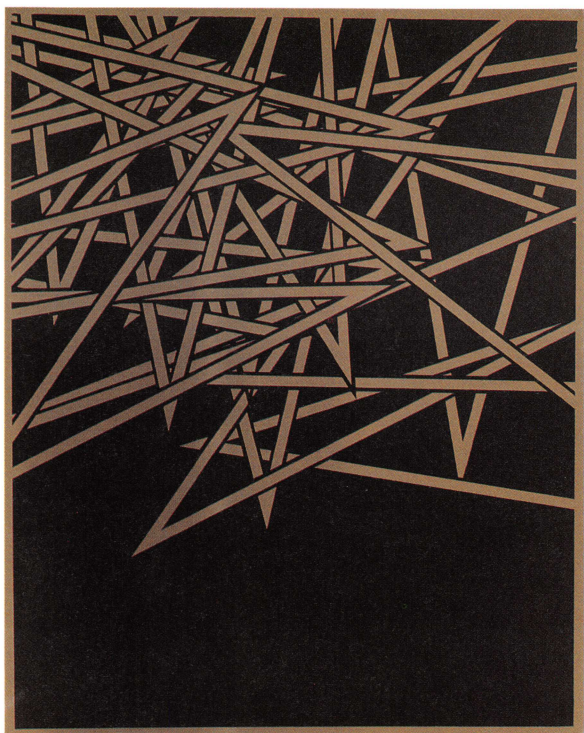
1-F Division82-11

39.0×54.3cm シルクスクリーン 1982年

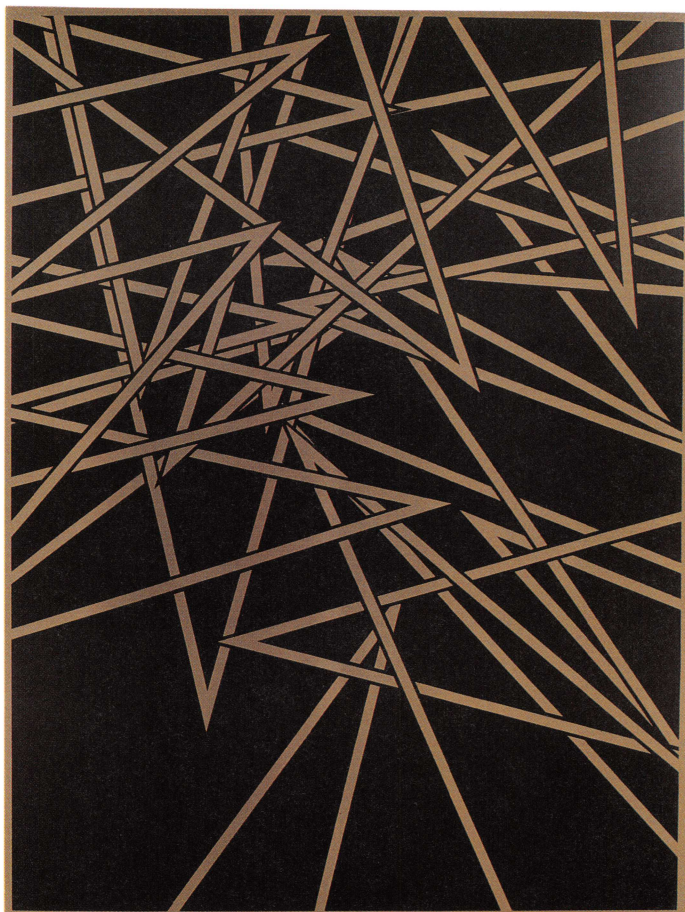


1-G Division83-1

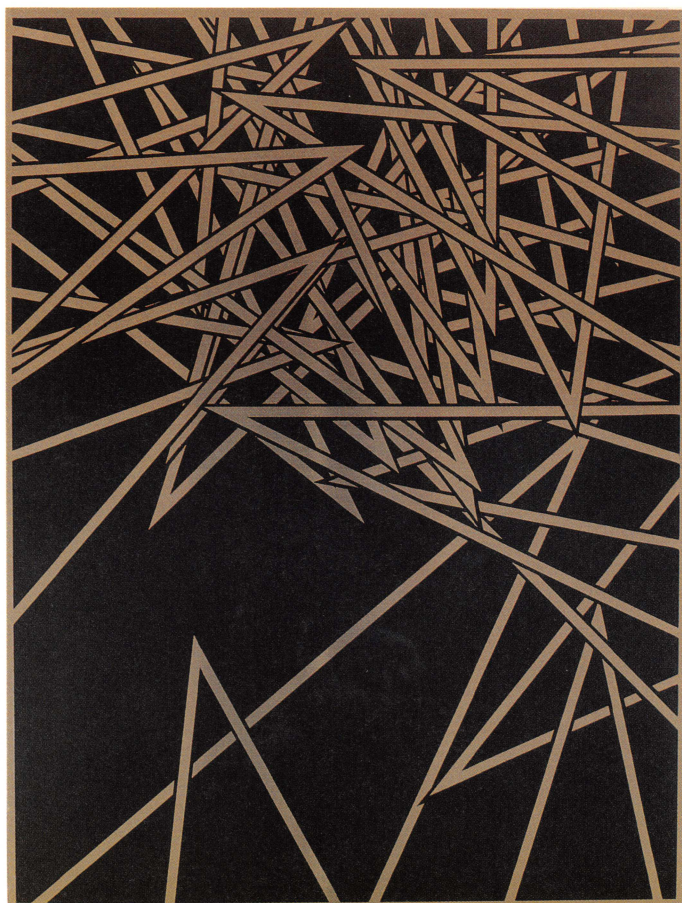
37.3×47.7cm シルクスクリーン 1983年



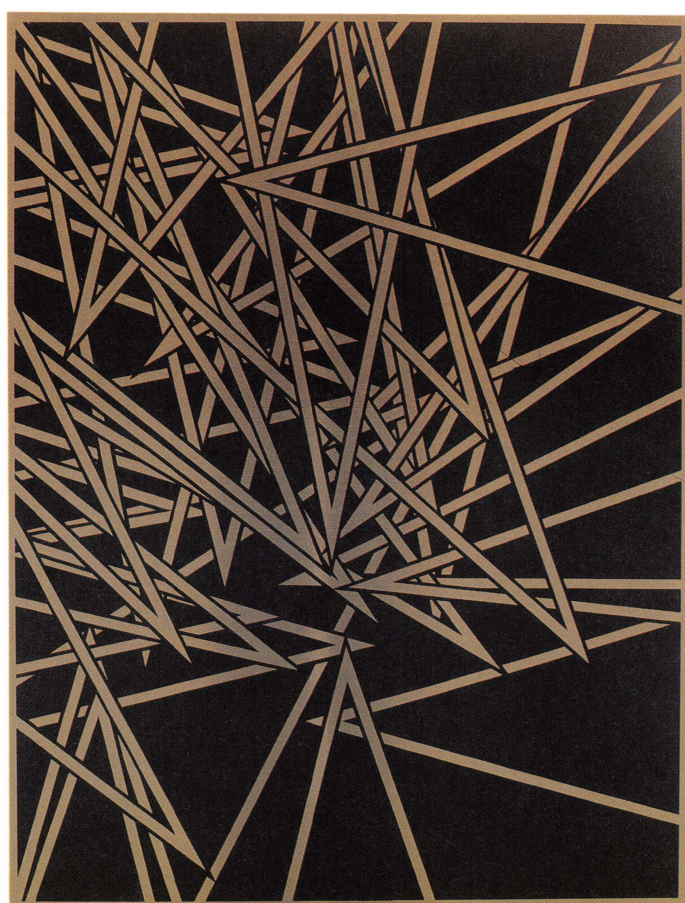
2-A Division87-7-2-⑪ 68.0×54.2cm  
ステンレスにシルクスクリーン  
1987年



2-B Division87-7-2-⑨ 86.0×64.5cm  
ステンレスにシルクスクリーン 1987年



2-C Division87-7-2-⑤ 86.0×64.5cm  
ステンレスにシルクスクリーン 1987年



2-D Division87-7-2-④ 86.0×64.5cm  
ステンレスにシルクスクリーン 1987年



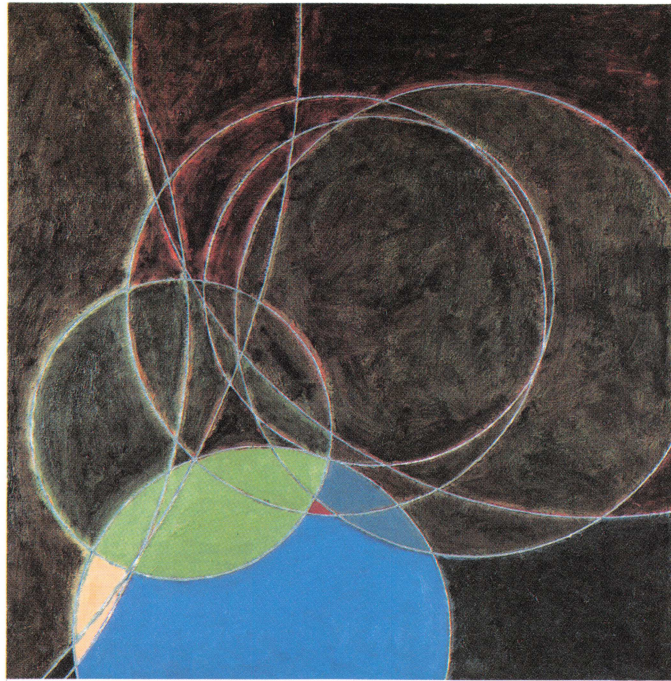
3-A Metabolism90-J

91.0×91.0cm 油彩 1990年



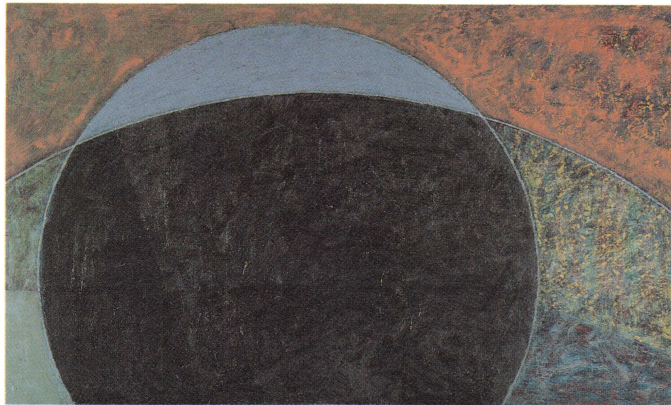
3-B Metabolism90-I

91.0×91.0cm 油彩 1990年



4-A Metabolism90-F

91.0×91.0cm 油彩 1990年



4-B Metabolism90-M

50.0×85.0cm 油彩 1990年



4-C Metabolism90-A

91.0×91.0cm 油彩 1990年



5-A Metabolism90-D

84.0×91.5cm 油彩 1990年



5-B Metabolism90-E

91.0×91.0cm 油彩 1990年



6-A Metabolism90-B

83.5×91.5cm 油彩 1990年



6-B Metabolism90-H

91.0×91.0cm 油彩 1990年



7-A Metabolism91-B

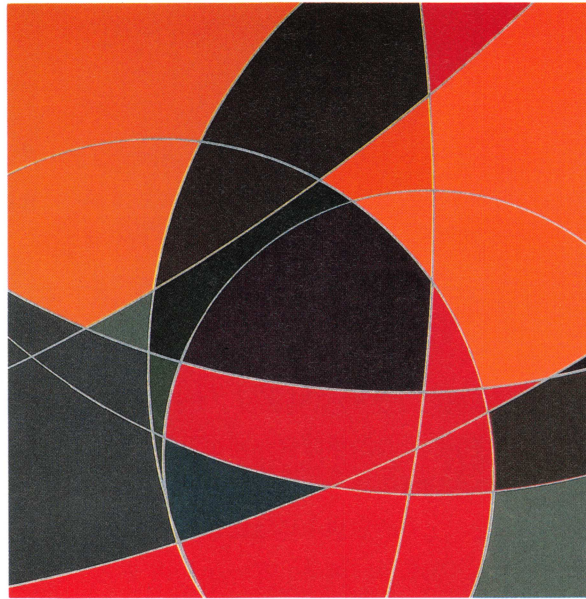
120.0×120.0cm 油彩 1991年



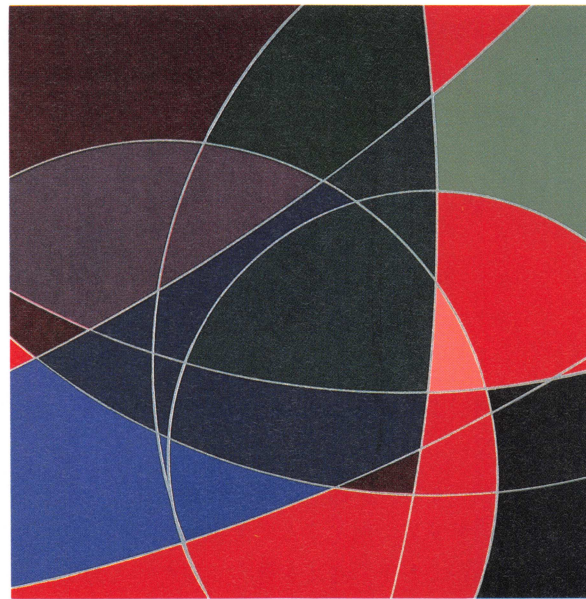
7-B Metabolism91-A

120.0×120.0cm 油彩 1991年

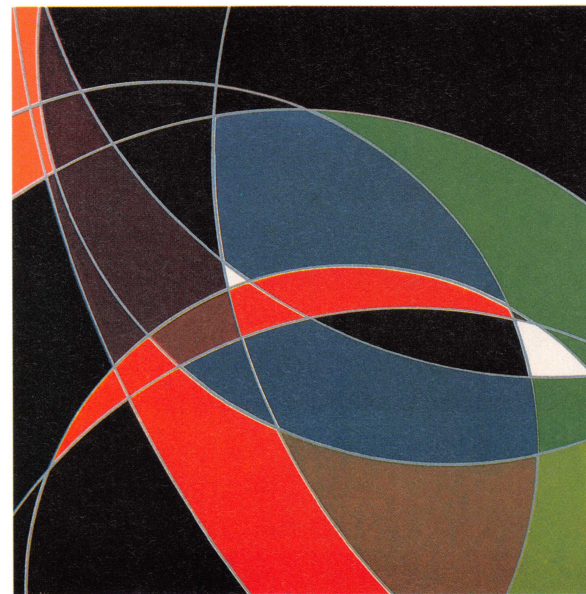




8-A Metabolism91-Cb 51.0×51.0cm シルクスクリーン  
1991年



8-B Metabolism91-Ca 51.0×51.0cm シルクスクリーン  
1991年



8-C Metabolism91-D 51.0×51.0cm シルクスクリーン  
1991年

絵画表現を行う場合、画面内に描かれ得るものは、直接その対象となる、あるいはなにか、あるいはなにごとか、ということと、それ以外のなにか、ということになるであろう。そこには、実態、あるいは観念として掌握し得るものと、把握しにくいもの、又はこと、さらには殆ど手の施しようのないこと、等々、奥行きや広がり等を伴って対面していることになると思う。表現である以上、その主題の具体化をすすめながら、同時に眼前や、観念においては、茫漠とした彼方での混沌も是認しているからであり、それとのかかわりを確認していく作業ともいえるかも知れない。その意味では、絵画は、ある特定画面に描かれたものか、こと、と同時に、その画面がどのような方向づけにおいて成立しているかということが基本的な条件になると思われる。

私の場合、今日における表現は、「円弧形態による構成」という抽象的畫面を扱っているが、いくたびか形態が変遷した。1960年代はじめころから制作活動と、その発表を開始したが、発表での作品形態は、抽象的畫面で一貫し、今日までつづいている。表現活動として考えた時、私の場合は、写生、つまり外在する物体や景観を描くといったところから始まっている。それは、今日の形象をつくりだす、あるいは、意識形成する動機として重要であった。眼前の素材対象の確認作業は、それを通すことにおいて抽象像知覚への手がかりをつくりだすこと、又、その対象の背後、あるいは、それを通しての暗示領域等に亘る問題の手がかりの場ともなった。そのことは、写生としての対象確認作業が、ただ単に、対象再現のみでなく、画面で扱われる形象自体が自律的にはたらいっているものであるという考えに暫時移行した。形象自体が、それ自体として自律しているという考え方は、やがて「分割」という概念と結びつき、主題とすることとなった。分割すること自体が、まず、自律的にはたらき、完結し

得るという考え方に基ずけば、画面における再現的意味は、随伴的現象ということとなり、写生時におけるのかかわり時点からすれば、優位性の逆転が暫時行われてきたということがいえるかも知れない。

個展による作品発表は、1968年から1991年に及ぶ20年間に15回を重ねたが、その内容は、ほぼ、抽象における、ある特定の記号的形態を扱ったものである。作品の題名は、1978年頃から「L字方式」、1983年から「Division」、1988年から「Metabolism」としているが、基本概念は分割にある。その形態内容は、凡そ、以下6段階に分類できると思う。I 半具象による構成（レリーフ）、II 方形形態による構成（アクリル、シルクスクリーン等）、III ボルトと合板による構成（レリーフ）、IV I字型、L字型等形態による構成（シルクスクリーン、レリーフ）、V 長形V字型（折直線）形態による構成（シルクスクリーン、アクリル絵具等）、VI 円弧形態による構成（油彩、シルクスクリーン等）  
掲載作品は、上記6段階の形態変遷のうち、IV V VIに関するものであり、それらについて若干の考えを述べてみたいと思う。

#### IV I字型、L字型形態等による構成

- 4頁／図No.1 - A、No.1 - B、  
No.1 - C

記号形態は、もともと画面分割が背景にあり、その知覚のエッセンスを視覚化しようとした試みからの形態である。したがって分割記号のひとつの様式である。それと同時にその記号の画面における位相と、それに伴った記号の向性等に関心を寄せた。25ミリ程の厚手の合板、鉄釘、ラッカー等によるレリーフ作品で半立体による視覚的印象性を考えながら制作したもの。

#### V 長形V字（折直線）形態による構成

- 4頁／図No.1 - D、No.1 - E、No.1 - F、  
No.1 - G  
5頁／図No.2 - A、No.2 = B、No.2 = C、  
No.2 - D

4頁の作品においては、L字記号が空間を過り、別の分割空間概念を与える。L字型のもつ位置の指定性とは異った画面の2分性（V形態の内と外）、それらの記号が重層する。やがてV形記号のみの画面となる。

5頁の作品においては、V形態の線において一定幅を特に与えた。V形態が他のV形態と重複する場合、奥行きにおける、前面と後面とを区別するとの必要から、各々の線の両端に僅かな境界線を設けている。ステンレス板とシルクスクリーンによる作品。

#### VI 円弧による構成

- 6頁／図No.3 - A、No.3 - B、  
7頁／図No.4 - A、No.4 - B、No.4 - C  
8頁／図No.5 - A、No.5 - B  
9頁／図No.6 - A、No.6 - B  
10頁／図No.7 - A、No.7 - B  
11頁／図No.8 - A、No.8 - B、No.8 - C

6頁から11頁にかけては、1990年以降、今日までに至る形態である。画面に線を与えることは、空間の分割を意味するが、V形態によるそれと、円弧形態によるそれとは、趣を異にする。小、中、大、さらには、巨大な円弧の一部が画面を構成する。V形態、円弧形態それぞれが特定空間を分割する、という意味においては、共通しているが、円弧の場合、形態自体が閉じており、それ自体で既に完結している、という意味においては、V形態と異った局面で対しなければならない。この制作においては、力という概念を加えたいと考えている。外へ向かう力と内へ向かう力の拮抗、あるいは、周辺を巡る力、エネルギー等が主題とかかわってきているように考える。